

ケイ・セージの卵について ―母親との関係から―

長尾 天 (成城大学)

シュルレアリスムの画家ケイ・セージ (Kay Sage 1898-1963) は、広漠とした空間にそびえ立つ無人の幾何学的建築群を描いたことで知られる。セージについて発表者は、拙著『イヴ・タンギー アーチの増殖』(水声社、2014年)において考察を行った。だがそこでの考察は、セージを、二番目の夫であるタンギーとの関係から捉えるものだった。これに対して本発表はセージが描くイメージをその個人史から考察する。

セージの個人史とその作品は、卵のイメージにおいて結びつく。セージは《少し後で》(1938年)などにおいて、しばしば卵を描いている。またその自伝的テキストは『磁器の卵』(1955年に執筆)と題されており、卵はセージの自己イメージとみなすことができる。伝統的に、卵は創造や復活、処女懐胎と結びつく。だがセージの卵は「磁器の卵」であり、それは可能性の象徴でありつつも決して孵ることはない。セージにおける卵のイメージをこのように捉えた場合、それは《稲妻の巣》(1950年)など多くの作品でセージが描いた無人の建築群とも結びつく。これらの建築群は未完成であり、つまり完成の可能性を孕みながらも決して完成することがない。孵らない卵と未完の建築群は、成就しない可能性という点で重なりあう。この意味において、セージは一貫して孵らない卵を描き続けたとも言える。

セージの個人史からこの孵らない卵のイメージを捉える場合、最も注目すべきは母親との関係である。母との関係を焦点とすることは、セージの問題をタンギーとの関係からジェンダーの問題に回収してしまう先行研究を、再検討することにつながる。セージはアメリカの富豪の娘として生まれたが、両親は早くして離婚。アルコール中毒など様々な問題を抱える母との密接かつ孤立した関係の中で、セージは成長した。こうした境遇はセージに、娘でありながら母の保護者でもなければならぬという矛盾した役割を背負わせたことが『磁器の卵』からうかがえる。セージは母との関係において、子どもであると同時に大人の役割を演じざるをえなかったのであり、磁器の卵は、子ども(卵)のまま大人(硬くも脆くもある磁器)にならざるをえなかったセージの自己イメージである。また《隠された手紙》(1944年)に描かれる顔のない巨大な女性のイメージには、セージを呪縛する母の姿を見て取ることができる。その後、美術の道に進むことで母から解放されようとしたセージだったが、イタリア貴族との結婚によって再び自らの可能性を閉ざしてしまう。10年間の無為な結婚生活の後、セージは画家としての道を歩み出す。だが既に述べたように、セージは成就しない可能性のイメージを描き続けた。それは安易な自己実現の幻想に陥ることなく、自己を呪縛する問題に向かい合い続けるという選択だった。結果としてセージの作品は、いわばネガとして、シュルレアリスムのイメージに対する一種の批評的イメージに到達するのである。